

## 「カエサルのもものと神のもの」

マルコの福音書 12:13~17

### はじめに

前は、イエシュアに対して殺意を抱き、これを捕えようとして近づいてきたユダヤ人指導者たちの姿が描かれていましたが、今回の箇所では逆にイエシュアを生かそうとして近づいて来る彼らの姿が描かれています。しかし生かすと言っても、イエシュアを受け入れ、その御言葉に聞き従うということではなく、イエシュアを利用するため、つまりイエシュアを自分たちの都合の良いように活かす、用いる、操るためです。なぜならこの時すでにイエシュアはその御言葉と数々の御業、奇蹟によって、人々から神の預言者として、ダビデの子すなわち王なるメシアと呼ばれていました。ですからここでイエシュアを殺し、排斥してしまうよりもむしろその力を利用して、自分たちの主義主張、立場をより優位なものにしようと彼らは考えたのです。以下の箇所を見てください。

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:13 さて、彼らはイエスのことばじりをとらえようとして、パリサイ人とヘロデ党の者を数人、イエスのところに遣わした。

「彼らはイエスのことばじりをとらえようとして」とあります。ここに使われているターファス(תוף)というヘブル語は本来、「楽器を鳴らす、奏でる(創世記 4:21)」という意味を持った言葉です。音楽のライブやコンサートなどに見られる、観客の拍手喝采、歓声は、決して楽器や音響設備などの道具に向けられるものではありません。それを奏でる、操る者、演奏者、ミュージシャンたちにこそ向けられるものです。つまりユダヤ人の指導者たちは、イエシュアを自分たちの楽器として、自分たちが人々にたたえられるための道具としてこれをターファス「とらえようと」した、操ろうとしたということです。みなさんは「虎の威を借る狐」ということわざをご存じでしょうか。ある一頭の大きな虎が、一匹のひ弱な狐をつかまえました。すると狐が「天の神が私を百獣の長にしたのだから、私を食べると天の命令に背くことになる。嘘だと思ふならついてきてごらんさい。」と言いました。虎が狐のあとをついて行くと、獣たちはみな逃げ出しました。虎は、獣たちが自分を恐れて逃げたことに気がつかなかった、という寓話から出た言葉です。これと似たようなことをユダヤ人の指導者たちはイエシュアに対して行おうとしたのです。それは実際にどのようなものだったのかを見てみましょう。

### 1. 欺瞞

イエシュアのみもとに「パリサイ人とヘロデ党の者」がやって来ました。この両者はともに、当時のイスラエルを支配していたローマ帝国に対して反発的な態度を取っていた存在でした。なぜならパリサイ人はローマの法よりも、聖書から派生した口伝律法を重んじ、またヘロデ党の者たちはその名のとおり、ローマ皇帝カエサルよりも、その傀儡(かいらい)の王であったヘロデにつき従う者たちであったからです。宗教的立場にあるパリサイ人と、政治的立場のヘロデ党、一見相反する考え方を持つ両者でしたが、とも

に反ローマ主義、すなわちローマ帝国の支配から脱したいという立場においては意見が一致していました。そのために彼らはイエシュアを利用しようとしたのです。

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:14 その人たちはやって来てイエスに言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、だれにも遠慮しない方だと知っております。人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、カエサルに税金を納めることは、律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないでしょうか。」

「カエサルに税金を納めること」ここに使われているマス(מַס)という言葉は本来、「奴隷、苦役を強いられること(創世記 49:15)」を意味する言葉です。そして「律法にかなっているでしょうか」という箇所に使われているクーン(קוּן)は本来、神が後に起こそうとして「定めておられる」こと(創世記 41:32)すなわち神のご計画を指す言葉です。彼らはイエシュアに、ローマに税金を納めるべきか否かという二者択一の質問をしているわけではありません。イエシュアを「人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられる」御方とした上で、神の民であるイスラエル、ユダヤ人である我々が、神以外のものに仕える奴隷となってはならないということを主張し、ローマ「人の顔色」を、カエサルを恐れることなく、むしろこれに対抗しましょうと呼びかけ、イエシュアの自分たちへの賛同、参与を促しているのです。このイエシュアによるローマの奴隷、圧政からの解放という、パリサイ人とヘロデ党の考えは、一見神の御心にかなった聖書的なものに見えます。しかしイエシュアは「彼らの欺瞞を見抜き」たとあります。

マルコの福音書【新改訳 2017】

12:15 イエスは彼らの欺瞞を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか…。」

ここで「欺瞞(ぎまん)」と訳されているヘブル語はハーネーフ(חֲנֹפֶת)と言い、本来は「汚す」ことを指す言葉です。その最初の言及を見てみましょう。

民数記【新改訳 2017】

35:29 これらのことは、あなたがたがどこに住んでも、代々守るべき、あなたがたのさばきの掟となる。  
35:33 あなたがたは、自分たちのいる土地を汚してはならない。血は土地を汚すからである。土地にとつて、そこで流された血は、その血を流した者の血以外によって宥められることはない。  
35:34 あなたがたは、自分たちの住む土地、わたし自身がそのただ中に宿る土地を汚してはならない。  
【主】であるわたしが、イスラエルの子らのただ中に宿るからである。」

これは罪の汚れについて、その宥め、贖い、つまり罪の赦しについての定めと教えです。ここに聖書で最初のハーネーフが使われています。つまりイエシュアは、彼らユダヤ人たちがハーネーフ、罪に汚れているのを見た、見抜かれたということです。そしてその罪の汚れは「血…によって宥められる」贖われる、きよめられるということが定められています。イスラエルの汚れをきよめる血、それはイエシュアの血以外にありません。イエシュアが十字架で流される血、その血によって初めてイエシュアは彼らユダヤ人に

賛同、参与すなわち「【主】であるわたしが、イスラエルの子らのただ中に宿る」ことになるのです。イエシュアが十字架にかかれていないこの時点で、彼らとともに立ち、ともに行くことは、神のご計画ではありませんでした。そして何よりイエシュアは天の父なる神の御心、そのご計画にのみ従われる御方です。パリサイ人やヘロデ党がどのような考え、立場であったとしても、イエシュアが彼らに従って行かれることなどあり得ません。ですから彼らのイエシュアに対するこの問いかけは、見方を変えればサタンの誘惑です。サタンは彼らを用い、「私に賛同し、従えばイスラエルを奴隷から解放するという神のご計画が成し遂げられるぞ」と誘惑しているようにも見えます。サタンはかつてイエシュアの御前に現れよう誘惑しました。

#### マタイの福音書【新改訳 2017】

4:8 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、  
4:9 こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」

イエシュアとユダヤ人たちの間に、これと同様の誘惑が、巧妙に仕掛けられていたと思われます。しかしイエシュアはこれを見事に「見抜いて…なぜわたしを試すのですか」と言われたのだと考えられます。

## 2. 肖像と銘

#### マルコの福音書【新改訳 2017】

12:15 …デナリ銀貨を持って来て見せなさい。」

12:16 彼らが持って来ると、イエスは言われた。「これは、だれの肖像と銘ですか。」彼らは、「カエサルのです」と言った。

12:17 するとイエスは言われた。「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」彼らはイエスのことばに驚嘆した。

イエシュアはカエサルの「肖像と銘」が刻まれた銀貨を見られました。ちなみに銘形先生の「銘」は神の銘だと考えられます。さて「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい」とイエシュアは言われました。これはこの世を分ける、すなわち裁く者としてのイエシュアの神宣言です。つまり人によってでも、ましてやサタンによってでもなく、わたしが裁くのだとイエシュアは言っておられるということです。そしてカエサルのもの、すなわち神のものではないものにはそのような「肖像と銘」が刻まれていることをも示されました。ヨハネの黙示録にこうあります。

#### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

13:6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。

13:7 獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された。また、あらゆる部族、民族、言語、国民を支配する権威が与えられた。

13:8 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。

13:16 また獣は、すべての者に、すなわち、小さい者にも大きい者にも、富んでいる者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、その右の手あるいは額に刻印を受けさせた。

19:20 しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。

20:4 また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。また私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。

ヨハネの黙示録には、やがて神に敵対する「獣」反キリストとも呼ばれる人物が現れることが記されています。そして彼は自分に従う者にはすべて「刻印」を受けさせるとあります。この「獣」は神を冒瀆しつつも全世界を支配します。しかしやがて彼は捕らえられ、「硫黄の燃える火の池に投げ込まれ」ます。そして彼に従って「刻印」を受けた者もみなそこに投げ込まれます。当時現人神となえられたローマ帝国の皇帝カエサル「肖像と銘」すなわち「刻印」が刻まれたデナリ銀貨を掲げ、「カエサルのものはカエサルに」と言われたイエシュアの言動には、この事実、神のご計画が「型」として表されていると考えられます。そして獣を火の池に投げ込むのはわたし、イエシュアであると宣言しておられるのだと考えられます。また同時に「神のものは神に返しなさい」と言われ、「地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されて」いる者たちは、メシアであるイエシュア「とともに千年の間、王として治め」るようになることをも示されていると考えられます。

### 3. 驚嘆

そしてイエシュアの御言葉を聞いたパリサイ人とヘロデ党の者たちは「驚嘆した」とあります。実は彼らのこの反応も預言的であり神のご計画を表しています。なぜならここに使われているターマ(תָּמָה)は本来、このような場面で使われました。

創世記【新改訳 2017】

43:33 彼らはヨセフの前で、年長者は年長の席に、年下の者は年下の席に座らされたので、一同は互いに驚き合った。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルの、その十二人の息子たちの出来事です。十一番目の息子ヨセフは、兄たちの妬みと怒りによってエジプトへ売り飛ばされました。しかし神は彼を祝福し、やがて彼にエジプト全土を支配する権威をお与えになります。そのヨセフの前にイスラエルの子たちが「座らされた」という事実に対する「驚き」、それが聖書で最初のターマです。イエシュアは「ヨセフの子」とも呼ばれる御方です(ヨハネ 1:45)。つまりこの出来事は、やがてイエシュアの御前にイスラエルの民が集められ、そこにとどまり、ともに住まうようになる、という神のご計画を表した「型」である

ということです。イエシュアの御言葉にターマ「**驚嘆した**」彼らの姿には、その事実が指し示されていると考えられます。ちなみに前回の箇所では、ユダヤ人指導者たちはイエシュアのもとから去って行きましたが、今回のパリサイ人とヘロデ党の者たちはそのようには記されていません。この点も注目すべき所だと思われま。実際には彼らもまた立ち去ったのかもしれませんが。しかしやがてイエシュアが再臨され、一度（ひとたび）彼らイスラエルを集められるなら、彼らはもう二度とイエシュアから、神から離れる、また離されることはないという事実が、ここには指し示されていると考えられます。

イエシュアがイスラエルの民を集められる時、それはいつどのようにして起こるのでしょうか。今日の登場人物であるこの「**パリサイ人とヘロデ党**」という「**銘**」に、その名にそれが刻まれ、表されています。パリサイとは「明らかになる(レビ 24:12)」という意味のパーラシュ(פֶּרֶשׁ)を由来とする名と考えられ、それは本来、「神をののしった者が殺される」という出来事を指し示して使われた言葉です。

レビ記【新改訳 2017】

24:11 そのとき、イスラエルの女の息子が御名を汚し、ののしった。

24:12 人々は【主】の命が彼らには**はっきりと示される**まで、この者を留置しておいた。

24:13 【主】はモーセにこう告げられた。

24:14 「あの、ののしった者を宿営の外に連れ出し…全会衆が彼に石を投げて**殺すようにしなさい**。

またヘロデ(סֵדוּדִי)はギリシャ語名ですが、ヘブル語で表記すると「降りる、下る」という意味の「ヤーラド(יָרַד)」という言葉を見つけることができます。これは本来、神に対抗しようとしたバベルの民が建てた塔を見るため、それを打ち壊すために神が降りて来られた(創世記 11:5)という出来事を指し示しています。パーラシュ、ヤーラド、この二つの言葉の本来の意味を組み合わせると、なんと先に述べた黙示録の預言にある、**神を冒瀆する者、獣と呼ばれる反キリストが、再びこの地に降りて来られる、再臨されるイエシュアによって、その国もろとも打ち滅ぼされる**という事実が、神のご計画が浮かび上がってくるのです。つまり「**パリサイ人とヘロデ党**」の者たちがイエシュアのみもとにやって来たというこの一連の出来事は、人やサタンの企みをもその手に握っておられる神のご計画を表すものであったということなのです。

#### 4. 信じるまで

「**カエサルのはカエサルに、神のものは神に返しなさい。**」やがて神は、イエシュアによってすべての人を神のものと、そうでないものとに分けられます。神のものは「神の国」へ、そうでないものは「火の池」ゲヘナへと分けられます。この事実を信じ、受け入れ「神の国」の到来を待ち望む人は幸いです。しかし受け入れられず、理解できない、信じられない人もいるかもしれません。その人は信じられるようになるまで御言葉を聞き続けてください。私は神が許されるなら次回も、その次も、何度でもこの神のご計画について語ります。ですからぜひ聞き続けてください。信じられるようになるまで聞き続けてください。そして信じられるようになって、その信仰を守るために、それをより強固なものとするために、やはり聞き続けてください。聖霊の助けがありますように。